

『保元物語』の〈現在〉と為朝渡島譚

野 中 哲 照

一、はじめに

小稿は、前稿『保元物語』における語り手の〈現在〉と崇徳院怨霊〔国文学研究〕一〇一集、一九九〇・六の統稿である。前稿では、崇徳院怨霊の怖れられたる時代（実的には治承三年のころだが、必ずしも実体と直結する必要なし）に語り手の〈現在〉が定位され物語が語られていること、崇徳院怨霊によってこの物語は外側から締めつけられ、そのことによって作品の構造が規定されていること、を述べた。

前稿で積み残した問題が二点ある。一点は、物語末尾の為朝渡島譚をどう読み解くかであり、もう一点は、語り手の〈現在〉の実体性・虚構性の問題である。そのうち、為朝渡島譚の問題を解決しようとするのが、小稿の目的である。

前稿のように、怨霊によって締めつけられている一面を強調しすぎると、この物語は怨霊慰撫のモノガタリとしての作品構造であることになる。そのこと自体を否定するわけではないものの、

締めつけられていることを装った歴史叙述としての側面をも見逃すわけにはいくまい。前稿では為朝渡島譚の棚上げによって、崇徳院に収斂するかたちでの作品構造が見えてきたのであるが、小稿では、為朝渡島譚と崇徳院怨霊譚とを有機的な連関を持つものとして捉え直し、さらに、怨霊鎮めのモノガタリではない側面——すなわち『保元物語』を歴史叙述として規定しようとする指向性——を析出したいとも考えている。

なにしろ、崇徳院怨霊に注目するばかりでは、合戦部の為朝・義朝を中心とする合戦譚などは全く位置づけられないのだ。崇徳院に対しては「畏怖」であり、為朝らの武士に対しては「興味」であるというようなレベルの——一面は真実であろうが——分裂を容認したままでは、なぜ物語の巻末を崇徳院と為朝で締め括ろうとしているかの答えを引出すことは難しい。

二、為朝渡島譚再考

——イニシエーションとしての葦ガ島渡り——

為朝渡島譚とは、為朝が大島に到着してから伊豆七島を押領して自害に至るまでの、一般に「為朝鬼ガ島ニ渡ル事 並ニ最後ノ事」(未刊国文資料)と名付けられている章段全体を指す。為朝渡島譚については、前に論じることがあるが、あらためて考え直さなければならぬ点もあると思われる。それは、鬼ガ島(葦ガ島)の中途半端な異界性の問題であり、それに関連する渡島譚全体の性格である。

従来この渡島譚の中でも、とくに鬼ガ島に渡る部分が注目され、また、「為朝鬼ガ島ニ渡ル事、並ニ最後ノ事」という未刊国文資料本の章段名もあって、鬼ガ島渡りとして読まれる傾向が強かった。しかし、その住人は昔は鬼であったが今はその末裔でしかなく、「武キ心モ無」く、為朝が「鬼島トハ不可云」と言つて「葦島」と改名させたと語られている。また一方で、為朝追討の武士として、実在の「伊藤・北条・宇佐美平太・加藤太・加藤次」を登場させ、現実世界に引き寄せている。つまり、テクストを忠実に読むと、この話は純粹な異界の鬼ガ島譚として規定されていないことになる。また、章段名も半井本原本にはないもので、未刊国文資料編者が流布本によって便宜的につけたものに過ぎない。したがって、小稿では、中途半端な異界性(最辺境というべきか)の表現に忠実であるために、この話を葦ガ島渡りと呼ぶことにしたい。

先行説では、本編で「理想的」に造型されていた英雄為朝が渡島譚で残酷な悪役に変容して人物像としての一貫性がなく、後補的であるという言い方がされていた。人物造型の首尾一貫した整合性を重視する近代的な人格の扱い方や、為朝の最期であるから、それにふさわしく為朝のエネルギの発散がなされているはずだとの先入観が、為朝渡島譚を読み誤らせていたといえよう。そもそもこの渡島譚は、為朝の、いわゆる英雄的最期を形象するようなには表現されていないことに気づくべきであった。為朝は、十分に暴れてこの物語から去つて行つたとは、とてもこの渡島譚からは読み取れないのである。

次のように、渡島譚の始まりで為朝の所領獲得譚と規定されているらしいところから、問題の洗い直しを始めよう。

(為朝)「哀レ安ヌ物カナ、朝敵ヲ責テ、將軍ノ宣旨ヲ蒙リ、国ヲ庄ヲモ給ハルベキニ、イツモ朝敵ト成テ流レタルコソ惜ケレ。今者此嶋コソ為朝ガ所領ナレ」トテ、伊豆ノ大嶋、ミヤケ嶋、カウツ嶋、八丈ガ嶋、ミツケノ嶋、ヲキノ嶋、ニイ嶋、ミ倉嶋、此七ノ嶋ヲソ領シタル。此七ノ嶋ハ宮藤斎茂光ガ所領也。一所モ主ニハ不能押領ス。

これは為朝自身による所領獲得開始宣言である。為朝の流罪はこれが初めてなので、波線部の「イツモ」は「朝敵ト成テ」にのみ懸かつて、「流レタル」には懸かからないと解釈すべきか。この「イツモ」の為朝の自覚の背景には、次のように、筑紫での掃討行為を朝廷から勘責されたことが下敷きとなっている。

1、上ヨリモナサレヌニ、我ト鎮西ノソウ追捕使ニ成テ……

2、君ヨリ給ヘラヌニ、九国ノ惣追捕使ト我ト号シテ、九国ナビケントスルニ……

為朝はまず大島に流され（後に引用）、続いて伊豆の七島を押領し、次の段階で八丈島から半、異界ともいべき葦ガ島（もと鬼ガ島）へ渡る。その過程を語る際、次のように、伊豆の七島でも、葦ガ島でも、「年貢」の貢納を強要するところに、為朝の所領獲得譚として形象しようとする指向性が窺われる。

1、茂光ガ代官ニ嶋ノ三郎大夫、茂光ニメラレテ恐レシム、嶋ノ年貢ヲ伊豆ヘゾ与タリケル。罽ノ為朝ハ是ヲ聞テ、勇ヲ擲テ右指ヲ五ナガラ切落ス。「伊豆の七島に對して」

2、八丈ガ島ノ脇ノ嶋ニテ、「年貢ヲ上ヨ」ト云ケレバ、「船無シテ、イカデカ年貢ヲアグベキ」ト云ケレバ、「三年ニ一度コレヨリ渡テ可納」トゾ申ケル。「葦ガ島に對して」

孤高の英雄として、また、無頼の徒として、為朝の最期を語ろうとするのであれば、為朝は、ただ超人的な力を發揮するだけでなく、それこそ鬼にも打ち勝つような奮戦をすればよい——所領を獲得する必要はない——。また、その超人性の延長として、異界的な土地へと旅立つてゆけばよい。しかし、この話はそのように伝奇的には形象されていないのだ。その理由は、この話の結末が、朝廷（後白河院）に對する為朝の敗北という、現実性を帯びた話であるため、為朝が伝奇的に異界へと旅立つには行かず、再び「日本国」と對峙するために回帰しなければならぬからだろう。語り手が、単純な為朝の狼藉譚・奮戦譚の方向に流されないよう、注意深く所領獲得譚として展開しようとしている点に、ま

ず注目すべきであろう。

そして、為朝渡島譚における葦ガ島渡りの機能を知るための鍵が、次の茂光の奏聞である。

茂光ハ都ヘ上テ、保元ノ主上ヲリキニテ座ケリ、奏聞シケルハ、「為朝ハ肩癒付テ矢柄長ク成テ、弓ノ力ハ劣ト云物ヲ、通ス事ハ昔ニ同ジ。茂光ガ所領七嶋ヲ押領在リ、一所モ不与。其上昔ヨリ名ダニ聞ヌ嶋ヲ一、鷲ガ渡ヲシルベニテ求出シテ候也。其嶋ノ住人等、鬼ガマ末ニテ、長ハ一丈余リニテ皆大童也。刀ハ右ノ脇ニサイテ何事モ人ニハ違ヘリ。カムルカムル物ヲ随ル惡党、為朝ニ多ク付ナバ、日本国ニモ心ヲ懸ベシ。院宣ヲ給テ、カレヲ追討仕ラム」トゾ申ス。「尤可然」トテ、鑾而院宣ヲ被下。

引用は省略するが、為朝の行動とともに進行していた語り手の説明では、葦ガ島の住人は「武キ心モ無」くしていた鬼の末裔で、しかなかった。しかし、右の茂光の報告では、恐るべき鬼の末裔で、「何事モ人ニハ違ヘリ」と強調され、同じ「鬼の末裔」でもニュアンスのずれを表現している。また、為朝は葦ガ島の童を一人連れて八丈島へ帰るが、その際の表現ではたんに「彼童」であるのに、茂光の奏聞を経た後では、「彼ノ鬼ノ嶋ノ大童」と誇大に表現している。

茂光の奏聞まで、為朝渡島譚は、大島↓七島↓葦ガ島と遠心的に外へ向かってゆく所領獲得譚であった。しかし、茂光の奏聞を契機として、為朝が「日本国」に敵對する存在と規定され、「日本国」を外側から（求心的に）脅かす存在に格上げされてしまう。

つまり、葦ガ島渡りは為朝を「日本国」を脅かす存在に反転させるためのイニシエーション（ある資格付与のための通過点）のような装置であつたと考えることができる。

以前、為朝像の造型に関与する場（出身地「筑紫」）の機能を考えたことがある。^⑥『保元』の語り手には、人物の造型に或る性格を付与しようとする際、——とくにそれが辺境性・在地性などである場合——その人物に或る場（舞台）を密着させることによって、性格づけを行なう方法が確認された。この方法が、為朝渡島譚でもとられたと考えることができる。

葦ガ島が半・辺境・半異界であることの意味は、一方では、現実の「日本国」と対峙するために求心的に回帰しなければならぬから、伝奇的な「異界」へ旅立つては困るわけであり、また一方では、為朝を「日本国」（後白河院）に恐れられるような異質な世界の洗礼を受けるべく外側へ押しやらなければならないから、ありきたりの「辺境」であっても困るのである。

思い返せば、為朝を遠心的に外側へ押しやろうとする展開は、為朝配流の場面から始動していた。

①（配流の道中）其時為朝申ケルハ、『奥ニ被人タリ、カキナヲ抜レタリケレバ何事カシ出スベキ』トゾ、ヲノレラハアナヅリ思カ、是ヲ見ヨ』トテ身ヲヨリケレバ、指モシタムカニ指タル奥ノ、既ニ是ヲモフミ破テ何クヘモ行クベケレ共、『王地ニ住ム身ナレバカクテハ被下ゾ』ト云ケル。②伊豆ニ下リ付テ、『流人ノ尻懸ル石ニ腰懸』ト云バ、『懸タラバ何カニ、懸ズバ何カニ』ト云テ、終ニ懸ズ。③大嶋へ渡ス。強儀

ヨリ外ノ事ナシ。

為朝が王権に対して従順にも「王地ニ住ム身ナレバカクテハ被下ゾ」という部分は、為朝らしからぬ、不可解な発言と解釈されてきたと思う。しかし、為朝は一方では奥を揺するなど依然として威力を保持していることを示威しつつ、下されゆく。つまり、①の文脈は屈折した表現といわざるをえないのである。それは、「王地」すなわち「日本国」からの脱出のためのプロローグとして、為朝を外側へ押しやる方向への展開が底流にあると見れば説明がつく。在地ないしは辺境という、為朝にふさわしい場所への回帰を志向している文脈なのだ。したがって、後の渡島譚に続けるために、威力の保持は十分に表現されている。ことに、腰掛石の話は伊豆に到着後の話であることを見落としてはならず、道中①は素直に下されて、伊豆に着いた途端②、不順な性格が顔を出したと表現し、さらに大嶋へ渡すと③、なお為朝の「強儀」が増長する。不順であるからと伊豆へ出し、なお不順であるからと大嶋へ出し、エネルギーを保持したものが外へはじき出された④⑤⑥⑦⑧。結末が、為朝渡島譚なのである。為朝を、崇徳院同様、はじき出された結果としての、ソトカラオビヤカスモノに仕立てあげようとしたのだ。

為朝渡島譚が本編と異質であるとの先行説の誤認は、『保元』合戦部がリアリティーに満ちているとの錯覚から発生している。しかし、はたして本当に合戦部はそのような性質の話であるうか。為朝がたった「一人」で最重要の門を固めたという非現実性、為朝「一人」に対して相手の天皇方の武士が次々に入れ替わる、バ

ランスを欠いた一対多の合戦構図、これらは崇徳院怨霊譚から為朝を注意深く外して「一人」残す意識（後述）や、再び「一人」で最期の奮戦をする渡島譚の為朝像と決して異質なものである。全く同じとはいわないまでも、——程度の差はあれ——造型の方性としては渡島譚の為朝は合戦部のその同一路線の延長線上にある。異質な「印象」は半異界ともいべき舞台からくるもので、為朝像そのものに亀裂があるという性質のものであるまい。史実に密着した作品としての『保元』の享受（読み）は根底から覆されなければならない。『保元』を一一五六年の物語だと考えたから先行説は渡島譚を「後日譚」と称したのであって、逆に語り手の「現在」を軸に考えれば、合戦部とは違和感がないことに気づくはずだ。

三、為朝渡島譚の〈現在〉

為朝渡島譚は、小稿のテクスト半井本では崇徳院怨霊譚の直後に位置し、物語の最後尾に位置する。そして渡島譚の最終記事は為朝の自害とその首の上洛であるが、そこで語り手は次のような評語を加える。⁽¹⁰⁾

今ノ為朝ハ十三ニテ筑紫ヘ下タルニ、三カ年ニ鎮西ヲ随ヘテ、我ト惣追捕使ニ成テ、六年治テ、十八歳ニテ都ヘ上リ、官軍ヲ射テカキナヲ拔レ、伊豆ノ大嶋ヘ被流テ、カムルイカメシ事共シタリ。廿八ニテ終ニ「人手ニ懸ジ」トテ自害シケル。

為朝ハ保元の乱の時「十八歳」で、自害したのが「廿八」歳で

あると読めるから、為朝の死は保元の乱から十年後の、仁安元年（一一六〇）のことになる。⁽¹¹⁾したがって、この話を語っている語り手の「現在」は、当然それ以降のことになる。翌仁安二年二月には清盛が太政大臣になるなど、平氏政権が隆盛を極めつつあった時である。しかし、為朝渡島譚の内部には、為朝の死と清盛の隆盛とを関連づけようとする類の時代背景の説明記事はないので、この話を歴史的実体に引き寄せて憶測を逞くすることは物語の表現意図からずれることになる。まずは渡島譚内部で表現しようとしている時代背景を忠実に読み解くべきであろう。

為朝渡島譚はその舞台が伊豆の島々であり、そこでの為朝の動静にスポットがあてられているので独立的・閉塞的であり、都の社会状況との関連性が薄い話である。しかし、為朝が伊豆で騒乱を起こしてからは、都と結びつざるをえない展開になる。

1、茂光へ都へ上テ、保元ノ主上ヲリキニテ座ケリ、奏聞シケルハ……

2、都ニハ為朝が首ヲ渡テ、院モ御覧有ケリ。

「保元ノ主上」とは、いうまでもなく後白河天皇であり、後白河天皇が「ヨリキ」の帝（上皇）となっているのである。重要なのは、「後白河院」などとストリートに表現せず、わざわざ保元合戦の時の天皇（為朝の敵方のトップ）であることを表現していることである。さらに、後白河院が茂光の奏聞の相手であることや、自害を遂げた為朝の首を後白河院が見たとする2の記述によって、後白河院の院政時代の話であることが知られるのである。

このように、為朝渡島譚の時代背景として表現されていること

の、もっとも重要な点は後白河院政期であることなのだが、語りの次の評語は時代背景の意味づけとしてさらなる限定を加える示唆を含んでいる。為朝の首が上洛した時の落首である。

イカナル物カ読タリケン、其時ノ歌也ケリ。「源ハタヘハ
テニキト思シニ千世ノ為共今日見ツル哉」

表の意味は、水源が涸れてしまったと思っていたところ、溜め池が今日満ちたことだ、であり、裏の意味は、源氏一族は滅んでしまったと思っていたところ、今日生き残りの為朝を見たことだであろう。そして、為朝最期の奮戦が水の勢いの復活と重ねられている。「千世」の為朝とは「千世の例」の懸詞であろう。『新編国歌大観』によれば「千世の例」の句を詠み込んだ歌は数十首に上るから、当時「チョノタメ」で容易に「千世の例」を想起することができただろう。『日本国語大辞典』は「千世の例」を「千年後まで生き残る例証」と訳している。すなわち「千世の為朝」とは、人々の心に永遠の生命力をもって刻み込まれたことに対する賞賛のニュアンスを含むことばであったのだ。この落首の直後、語り手が為朝を総括する評語として、「為朝ガ上コス源氏ゾナカリケル」と述べていることも、この解釈の補強になるだろう。

そこで、源氏が絶え果てたとする認識は、いつの時代に出現可能なことばであり、いつの時代を象徴することばであるかが問題となる。ひとつには、平治の乱で義朝が死んだ後だということ、が必須の条件となるだろう。もうひとつには、——こちらのほうが重要だが——頼朝や義仲が歴史の舞台に登場する前であるということだろう。為朝の死が物語内部では仁安元年（一一六六）と設

定されているから、これと齟齬しないのは当然のことであるし、為朝が死んだ「其時ノ歌」であると説明してはいる。しかし、この歌がこの物語における為朝の評価に関わっているだけに、そこに象徴されている時代相が、平治の乱以後、頼朝らの源氏蜂起の影がまだ見えぬ時代であること、言い換えれば源氏の暗黒時代／平家の全盛期であることは、特に注目すべきではないだろうか。語り手の〈現在〉は、為朝渡島譚の内部に限定してみても、為朝の死後、頼朝出現前、ということになる。

一方、作品外部の資料で、為朝渡島譚の形成に関与したと思われる話が『古今著聞集』（五九九話）にある。これは、「伊豆国奥島」に鬼の船が漂着し、島人と弓矢の争奪をめぐる合戦をする話である。

島人のなかに、弓矢もちたるありけり。鬼こひけり。島人
おしみければ、鬼、時をつくりて、杖をもちて、まづ弓もち
たるをうちころしつ。をよそうたるもの九人がうち五人は
死ぬ。

『保元』の為朝渡島譚でも、

其ヲ始トシテ、「嶋々ニ弓矢取テ能カラン者ハ、皆為朝ガ
敵也」トテ、カイナヲ打、肘ヲ折バ、其罪ヲ免レムガ為ニ、
「命ヲ失ハムヨリハ弓矢ヲ捨」トテ、嶋中ノ弓矢共各嶋に集、
皆焼失。為朝ガ弓矢計ゾ残ケリ。

と為朝が島人の弓矢を奪う場面がある。また、『著聞集』では、島人が「神物の弓矢」で鬼を退散させたとするが、『保元』でも為朝が「調伏」されて病にかかり、ついには自害に追い込まれる。

このように、両話には形成上の何らかの関係を想像させる要素があるが、『著聞集』のこの話は、冒頭で「承安元年七月八日」(一一七二)の事件として語られている。『著聞集』は年月を虚構するような性質の説話集ではないと考えられる。そこでこの伝承が承安元年(一一七二)のこととして伝えられている事実は、為朝渡島譚から析出した語り手の〈現在〉と(あるいは実体的な表現主体の時代とも)齟齬しないものとして、とくに注目しておきたい。

四、為朝渡島譚と崇徳院怨霊譚との連関

以上で、為朝渡島譚についての基本的な分析は終え、以下、これと崇徳院怨霊譚との相関関係について考えたい。

崇徳院怨霊譚と為朝渡島譚とは、一見、全く没交渉・無関係の話に見えるが、この物語の最末尾に連続して配置されること以外の、別の内部連関を持っている。

蓮如が夢想の中で、怨霊化した崇徳院の、都への侵攻を予兆的に見るが、そこでは次のように語られている。

讃岐院ノ^(四)西万興ニメシテ、為義父子六人先陣ニテ、平家忠正父子五子、家弘父子後陣ニテ、院ノ御所へ打入ラントスルガ、追帰レテ、……

保元合戦で崇徳院方についた武士たちが、怨霊化の後も崇徳院に属従している(「冥界でも供をしている」ということなのだが、その「為義父子六人」の中に、為朝は入っていないらしいのである。合戦前、為義の子供については次のように紹介されている。

(為義は)子供相具シテ参リケリ。当時手ニアル子共六人也。

四男四郎左衛門尉頼賢、五男治部権助頼仲、六男為宗、七男為成、八男為朝、九男為仲也。六人ノ子共引具シテ白川殿へ参タリ。(新院為義ヲ召サル事)

つまり、為義は子供「六人」とともに新院方に参じたのであるから、為義自身を入れると父子七人ということになる。このあたりの人数の表現がルーズにされていないことは、次の白河北殿の門固めの場面を確認できる。

同西へヨリタル門ヲバ、為朝一人シテ承ル。西面ハ川原ナリ。為義父子六人シテ承ル。

「同西へヨリタル門」とは大炊御門大路の西門で、地理的にもっとも重要な位置にあると考えられる門で、そこに「為朝一人」で固め、賀茂川の河原に面した門を「為義父子六人」で固めたという説明である。為朝一人を別格扱いにするのは、このあとの合戦部を為朝の一人舞台として構成するための伏線なのだが、この時の為朝を除外した人数の表現が「為義父子六人」なのである。さらに、義朝が為朝の固めている大炊御門大路の西門を避けて、為義父子の固める賀茂川に面する門に回った場面でも、

為義判官父子六人、大将ニテ命モ不惜禦ケレバ、此門又輒可落様モナシ。

と、為朝を除く父子の人数が「六人」であることは同じである。敗戦後、一時、父子七人あるいは兄弟六人で敗走しているが、再び為朝を別格扱いにしなければならなくなる場面がやってくる。

左馬頭(義朝)打手ヲ分テ遣ス。為朝ハ大原ノ奥ニ有ト見ヘテ、打破テ逃ヌ。行方ヲ不知。残五人、シズ原ノ奥ニ鞍馬

・貴船ナンドニ、アソコ愛ノ峯ヤ、アソコノ谷ニツカレ伏リケルヲ、押寄セ押寄セ擲取テ、船岡山ニテ切ラントス。五人〔馬〕ヨリ下テ浪居タリ。……〔中略〕……右衛門大夫 信忠ヲ差遣テ、五人ノ首ヲ切ル。

為朝を除く五人の兄弟がここで捕らえられ斬刑に処せられるが、為朝が捕えられるのはここから七章段あと（未刊国文資料で17頁あと、日付で約一か月後）の「為朝生捕、遠流ニ処セラル事」である。右の波線部の「行方ヲ不知」は、後の為朝逮捕の場面まで、為朝を物語の表面から隠してしばらく潜伏させるための伏線的な表現であると考えてよいだろう。このように、この物語の、為義父子に関する人数表現にはぶれなく、「為義父子六人」とは、為朝を別格扱いにする際に用いられる表現であることも確認された。したがって、崇徳院怨霊に屈従した武士の中から、為朝は注意深く外されているとみななければならない。

為朝渡島譚は独立性が強いために後補ではないかと疑われたこともあったが、①島での為朝の騒乱が拡大して都（後白河院）が動かざるを得ない展開にもっていく点、②兄弟五人の処刑時点から為朝「一人」を別格にする意図があった点、③合戦部の為朝像とも決して亀裂を起こしていない点、などから——たとえ素材段階では伝奇的な独立話であったとしても——この物語の段階ではすでに内に取り込まれたものとして読み解かねばなるまい。また、④崇徳院怨霊譚と為朝渡島譚との内部連関からみても、この物語の段階においては、ある意図を持って内部に取り込まれ、相互に関係を持たされていると考えなければならぬだろう。

五、崇徳院怨霊譚と為朝渡島譚の共通位相

第三節で導き出した為朝渡島譚の〈現在〉は、前稿において導き出した崇徳院怨霊譚の〈現在〉とも通底する側面を持っている。もちろん、崇徳院怨霊譚の最終記事が治承三年（一一七九）であることと、為朝渡島譚の最終記事が仁安元年（一一六六）であることは一致するものではないが、それぞれの話の時代社会的背景として象徴的に表現されていることは矛盾していない。

前稿で述べたことであるが、崇徳院怨霊譚の最終記事（『この物語の通時的最終記事でもある』）は治承三年のクーデタであった。しかし、『吉記』寿永二年（一一八三）七月十六日条と重なる情報を取り込んでいるから、実体的にはこの物語の表現主体は、寿永二年以降に位置していると考えられる。ところが、寿永二年の時点に立つと、当然見えてよさそうな事件を語り手は多く捨象している。それは、頼朝挙兵（治承四年＝一一八〇）であり、清盛死去（養和元年＝一一八一）であり、平家一門都落ち（寿永二年＝一一八三）である。いずれも平家が衰亡してゆく事件だからである。また、崇徳院怨霊の影響によって鹿の谷の陰謀事件や治承のクーデタが勃発したと語りながら、流罪に処せられた丹波少将成経の召還（治承二年＝一一七八）や後白河院の鳥羽殿幽閉解除（治承四年＝一一八〇）については語らない。怨霊の猛威を語る表現が弱まるからである。このようなことから、実体としての成立時点とは異なり、この物語の内部で表現されようとしている時代とは、後白河院政期であり、崇徳院怨霊がもっとも猛威を振るい、清盛が專

横を極め、まだ頼朝など登場していない、そのような時代であるということになる。

清盛との関わりこそないものの、為朝渡島譚の時代背景も、後白河院政期であることが強調され、しかも「保元ノ主上」として、保元合戦からの継続性を持って登場している時代である。さらに、頼朝などの登場する前の時代相であることも一致し、崇徳院怨霊譚・為朝渡島譚とも、次の時代の黎明を感じさせることのないような注意深い表現がなされているというべきだろう。次の時代への動きを少しでも語れば、『平家物語』の視界（構想）とも重なる脈絡（平家の興亡―因果応報、武士の時代の幕開け）へ延長線が引かれてしまはずだ。『保元物語』の語り手は、古代末期の「乱世」の表現に照準を合わせ、物語内部での時代社会の表現として集約したというべきだろう。

六、おわりに

為朝渡島譚と崇徳院怨霊譚との共通位相についての詳細は統稿に譲らねばならないが、小稿の段階での、ひとつの見解を導き出しておきたい。為朝渡島譚と崇徳院怨霊譚の共通位相とくに注目されるのは、①どちらもソトカラオビヤカスモノに仕立てられている点、②その反転する過程の展開に力が注がれている点、③語り手の「現在」がどちらも古代末期の「乱世」に定位されている点、である。

以上の三点を合わせて鑑みるに、おそらくそのように慎重に定位された「現在」とは、ある解釈を通して歴史を語るための作品

内視座であるのだろう。そして、その解釈とは、保元の乱以降「乱世」が続いていることに対する解釈であり、その目指すところは、これまで自明のことであった既存国家「日本国」をはじめて相対化しえたことを象徴的に表現することであったのだろう。

崇徳院・為朝の反転する過程、言い換えればソトカラオビヤカスモノに仕立て上げる過程にもっとも細工が凝らされているところに、相対化の象徴的表現の意図を看取できよう。諸史料に為朝大島合戦の痕跡が全く残っていないという事実、渡島譚の構成の全体に語り手の強い捏造が加わっていることを推測させる。そして、外側から揺さぶられた「日本国」の捏造を通して語り手が語ろうとしたのは、「日本国」の相対化・客観化であり、その契機——「太平」から「乱世」へのエポック——としての「保元ノ乱」の歴史的意義であったのだ。

さらに、右の三点の外、④為朝が崇徳院怨霊譚から注意深く外され、通時的な時間を逆転させて、物語の巻末に締め括りとして位置づけられた点も重要であろう。このことは、『保元物語』が崇徳院怨霊に締めつけられるばかりの、受動的な鎮めの物語として成立しようとしていないこと——たとえば合戦部の為朝・義朝を中心とした合戦譚のとりこみ——と関係があらう。それは、怨霊畏怖の生の段階を超え、歴史の解釈として怨霊を機能させるような（怨霊史観）段階の認識であると考えることができよう。

これらの問題を含め、統稿では歴史叙述として完結しようとする指向を析出し、『保元物語』の根元的な構造に迫りたいと考えている。

注(1) テクストは半井本「保元物語」による。古典研究会の影印本を用い、未刊国文資料本を参照した。

(2) 野中「為朝像の造型基調——重層論の前提として——」(「軍記と語り物」24号、一九八八・三三)。

(3) 前掲 注(2)の拙稿の、註(8)で述べた。

(4) この点は、前掲、注(2)の拙稿も誤っていた。考えを改める。

(5) 近代的な地理感覚では、伊豆七島を南へ伸びる列島と認識するが、おそらく「保元」では東の最果てと認識している。頼長の死を哀しむ父忠実が「東ニ有ト聞バ、エゾガ住ナルアクロ、ツガルヘモ、ナドカ馬ニ鞭ヲモ可不打。西ニ有ト聞バ、鬼界嶋ノ方ヘモ、ナドヤ船棹ヲモ可不打」と述べており、日本の国土を東西に長いものと認識している。一方、為朝は、青鷲が「東ヨ指テ飛ヲ見テ、八郎申ケルハ、【是ヨリ奥ニモ嶋ノ有バコソ鷲ハ行ラメ。……】」という経緯で八丈島から葦ガ島へ渡るので、伊豆の奥(＝東)が八丈島、それより奥(＝東)が葦ガ島であるとの認識を抱いていることが知られる。都を軸とした世界観において、東の最辺境ということである。

(6) 前掲 注(2)の拙稿に同じ。

(7) ソトとは、地理的な外部の意でなく、共同体の外側の意である。

崇徳院は日本国の内側の讃岐への配流であったが、怨讐化によって共同体を脅かす存在になった。また、モノとは得体の知れないものの意である。不可知の存在であるがゆえに、異化され、怖れられる。共同体の内側は、知悉の世界である。

(8) 野中「保元物語」合戦部の展開(「軍記と語り物」25号、一九八九・三)で合戦部がきわめて虚構性の強い構成だと述べた。

(9) 白崎祥一「後日譚考」——保元物語を中心に——(「古典遺産」

30号、一九七九・八)。同「保元物語」後日譚「考」——為朝鬼ヶ島渡島及び最後をめぐって——(「軍記と語り物」16号、一九八〇・三)。

(10) この引用文の前半は、合戦前の為朝紹介の次の部分と重なるものである。

十三ト申シ、十月ヨリ、軍ヲシソメテ、十五ノ三月マデ、大事ノ軍共廿余度罷合テ、城ヲ落ス其支度、敵ヲ打ハカリ事、人ニスグレテ候也。三年ニ九国ヲシタガヘテ、上ヨリモナサレヌニ、我ト鎮西ノソウ追捕使ニ成テ、今度六年ニ候ツル也。

十三歳で筑紫へ下ってから六年経過したと数えて、保元合戦の際に十八歳であるということになる。また、合戦の最中、義朝が、

八郎ハ能々カゾウレバ、今年ハ十八ニ成ト覚ル。勢ハ大ナリ共、未身ノ力ハツノルマジ。

と語っていることからみて、この物語の内部において、保元元年の時点を為朝を十八歳に設定することにはおそれはないと考えてよい。

(11) なお、為朝の死を仁安元年(一一六六)以外にとる説が、諸記録にはある。しかし、いずれも小稿で考えている許容範囲(平治の乱以降、頼朝挙兵前)の内側である。

① 嘉応二年(一一七〇)四月下旬……………古活字本「保元物語」

② 承安三年(一一七三)八月十五日……………「八丈筆記」

③ 安元二年(一一七六)三月六日……………「大乘院日記目録」尊卑分脉

④ 安元三月(一一七七)三月六日……………「尊卑分脉」別本

(12) 他にも次のような人数表現がある。合戦開始直後、為朝が自分の持ち場を離れて、為義と共にいる五人の子供と、河原で先陣争いをする場面、

河原ノ門ヲ固タル為義ガ子共六人、先陣ヲ争ヒケリ。

と為朝と一緒に勘定して「六人」と表現している。

さらに敗走時には為朝が合流しているので、

・為義ハ六人ノ子共ヲ招ツ、「禦矢仕レ」ト云置テ、我身ハ御共ニ落行。

・大將軍（為義）ノ重病ナルヲ見テ、郎等共皆ステ、逃失ヌ。

子共六人ノ外、郎等四人ト雑色花沢一人残ケル。

・（為義が叡山が出家したと聞いて）六人ノ子共、山へ尋ネテ上リタリ。

・（為義が出頭の決心をしたので）六人ノ子共、最後ノ共ノシ終トテ送ケリ。

・（後悔する為義の発言中で）カゝルベシトダニ知タラバ、

六人ノ子共、弓手妻手ニ立、矢種ノ有ン限り射尽テ、……

と為朝を含む「六人」と表現している。このように、「保元」内部では、一貫して人数の勘定にぶれはないとみてよい。

(13) 半井本成立以前に、島々の在地的な伝承（素材話）が存在した可能性は十分にある。その根拠として次のような理由があげられる。

① 為朝が最終的に渡った葦ガ島は、初めの説明では、不可視の遠い島で、鷺の飛ぶのを頼りに船で「一日一夜」かかって辿り着いている。しかし、後の説明では、「八丈ガ嶋ノ脇ノ嶋ニテ」とあり、矛盾する。推測するに、「一日一夜」なかった島はおそらく青ガ島のこと、八丈島の脇の島とは八丈小島のことであろう。両島とも為朝伝承が現在に伝えられる島で、葦ガ島譚の形成において青ガ島系と八丈小島系の伝承が混合したものと考えられる。

② 為朝が嶋の三郎大夫の娘を娶った経緯について何の説明もな

く、突然、物語の中の「鷺の為朝は是を聞て、舅を擲て」との表現で知られるので、背後に先行の伝承（為朝の当地での婚姻譚）の存在が感じられる。そして、為朝自害の場面で、九歳の嫡子を為朝が殺したので、その母が七歳の次男と五歳の女子とを隠して逃げたとある。前後の文脈から、この婚姻関係は大島でのものと考えられる。為朝の子孫を名乗る現存の大島の伝承と、この七歳の次男・五歳の女子の存在は重なると思われる。①と合わせて、為朝渡島譚には、大島・八丈小島・青ガ島など複数の島伝承が混入していると考えられる（なお、嫡子が九歳であることは、配流から十年後に為朝が死んだとするテキストの表現とも齟齬しない。伊豆到着の翌年に嫡子が誕生したというであろう）。

③ 第三節で述べたように、「古今著聞集」五九九話は「保元」の為朝渡島譚と関係があると思われる。「保元」のとくに大島に関する話の部分で、「著聞集」は先行話としての骨格を伝えていると考えられる。

④ ②のような痕跡の残存は、次のように考えるべきであろう。先行の素材話は、半井本テキストが最終的に規定しようとした物語の方向性とは異質であるため、語り手はそれらを改変してテキストに取り込んだが、素材話の主体が強かったため痕跡が残存した。

(14) 崇徳院と為朝とを同じ位相で考えようとした先行説に鈴木則郎「半井本『保元物語』の一考察——崇徳院・為朝の人物形象をめぐる——」（笠間書院『日本文芸論叢』一九七六・一一）がある。

その着眼点は卓見というべきだが、人物造型の相似性として把握しようとする点に不満が残る。巻末記事の機能と意味を解析し、この物語を総体として把握するためのアプローチとしていないからである。